

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第六號

第三十七卷

昭和八年十二月一日發行

論叢

所得稅改造の一案……………法學博士 神戸正雄

企業と所得稅負擔……………經濟學博士 沙見三郎

經濟本質論……………經濟學博士 石川興二

時論

小賣更生策としての自由連鎖店……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

投機と取引所……………經濟學士 今西庄次郎

アリストテレスの價值論……………經濟學士 白杉庄一郎

アングロ時代の社會單位について……………經濟學士 竹中靖一

說苑

マールの利子論……………經濟學士 青山秀夫

一般均衡論と交換方程式……………經濟學士 柴田敬

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第三十七卷總目錄

アリストテレスの價值論

白 杉 庄 一 郎

一

經濟生活は經濟價值の創造を中心とする。従つて經濟價值は、經濟生活を對象とする經濟學の根本概念であり、價值論はその論理的基礎である。經濟生活の學問的反省は萬學の祖アリストテレスに始まる。經濟學史の初めに於いてアリストテレスは如何なる價值論を持つたか。私はアリストテレスの精神科學たる「倫理學」(嚴密には「ニコマホース倫理學」)及び「政治學」に就いて、彼の價值論を尋ねて見度いと思ふ。勿論アリストテレスの價值論は、その他の彼の經濟思想と同じく、精神科學の中に含蓄されてゐて體系的に述べられてゐる譯ではない。だから私は上の二書にわたつて論ぜられてゐるところを取纏め、經濟價值一般とその現象形態との區別及びその分析、次にこの現象形態のもつ交換價值そのものゝ分析について述べ、終にそれらの理論の社會的基礎に即してその簡単な批判を試み度いと思ふ。

尙アリストテレス研究はギリシヤ語によるべきであらう。が、不敏にして英譯書 *The works of Aristotle, translated into English under the editorship of W. D. Ross, M. A. Vol. IX, X.* によつた。この點に關しても重大な誤りを犯してゐるかも知れない。特に記しておことわりして置く次第である。

二

アリストテレスは「倫理學」第一編第一章に「經濟學の目的は富である¹⁾」と述べて經濟學の本質を喝破してゐる。然らば富とは何であるか。アリストテレスの之に對する解答は「政治學」の中に求められる。曰く、「家政術なるものは、生活に必要であり、而して家庭又は國家に對して有用であるところの貯藏され得る物を用意し又は自らに支給しなければならぬ……それらは眞の富の要素である……斯くて富なるものは國家に於いて又は家庭に於いて用ひらるゝ若干の手段として定義されることが出来る²⁾」と。即ちこゝに富は人間によつて獲得され貯へ得らるゝ物財にして人間の生活に役立つ手段である。この意味に於ける富はあらゆる社會形態に通ずる一般的規定にして經濟價值即ち富一般といふことが出来る³⁾。

然しながら富は種々なる社會の發展段階に於いて、それに應じた種々なる現象形態を持つ。――例へば資本主義社會の富は龐大な商品の集積として現はれる如くである。アリストテレスもこの本質と現象との區別をなすや嚴格であつたと考へられる。即ち彼は「政治學」の前に引用した個所に引きつゞいて富の取得を論じ、自然的取得と交換的取得とに分けてゐるが、この交換によつて取得される富は一種の商品といふ特殊の形態をとることを豫想してゐる。そして別の個所では、その形態をもつて富だとも言つてゐる。即ち「我々は『富』といふ語によつて、その價值が貨幣によつて量られるところの總てのものを意味する⁴⁾」と述べてゐる。これは言ひ換へると交換價值

1) Ethica Nicomachea. I. 1. (Works of Aristotle. Vol. IX. p. 1094 a).

2) Politica. I. 9. (Works of Aristotle. vol. X. p. 1256 b).

3) 石川博士「經濟本質論」本誌第37卷第1號參照。

4) Ethica Nichmachea. IV. (ibid. p. 1119 b).

を有つた富、即ち商品である。然して當時のギリシャに於てはかくの如き富の形態は甚だ多かつたのである。今我々はかくの如き古代的生産方法による商品を資本主義的生産方法によるそれと區別して一種の單純商品と呼ぶならば、アリストテレスの經濟學はかくの如き形態の富の研究をも包括した。而して、その價值論は主としてこの單純商品を對象として展開されてゐるのである。

アリストテレスは先ず當時の社會に於いてむしろ支配的であつた富の形態即ち單純商品を分析する。「政治學」の中に曰く。

「我々の所有する總てのものについて二つの用がある。即ち兩者は共に物自體に屬してゐるのであるが、その屬し方は同様ではない。何となれば一つはそのものゝ固有なる用であり、他は固有ならざる又は第二義的の用である。例へば靴は穿く爲に用ひられ、且つ交換の爲に用ひられるのであつて、兩者は共に靴の用である。靴を欲する人に貨幣又は食物と交換に靴を與へる人は、なるほど靴を靴として用ふるのであるが、然しこれはそのものゝ固有又は第一義的の目的ではない。何となれば靴は交換の目的物となるために作られたものではないからである。これと同じことが總ての所有物について云へる……」⁵⁾

これが有名な使用價值と交換價值との區別である。それはアダム・スミスによつて “value in use” と “value in exchange” として承け繼がれた。⁶⁾ この意味に於いて使用價值と交換價值との區別は、實に物の經濟學的分析の根本的な第一歩であつた。前者は商品の質的規定であり、後者はその量的規定である。——然して、こゝに注意さるべきは、アリストテレスが單に「我々が所有する總てのもの」と言つたのは、實は單純商品であるといふ事である。何故ならこゝに抽出

5) Politica, I. 9. (Works of Aristotle, X. p. 1257 a).

6) Adam Smith, Wealth of Nations, vol. I. p. 30. 参照。

された交換價值を有つ物はすべて商品であるから。然るに彼は「靴は交換の目的物となるために作られたものではない」と言つてゐる。即ち交換價值を本來的に目的とせず従つて第二義的にしか交換價值を有しない物であるといふ點に交換價值を第一義とする商品から區別さるべき單純商品性がある。要するにこの「二つの用」の區別は商品形態をとつた富の分析の最初の鍵であつたのである。

ところでこの「二つの用」の中最も理解し難く基礎づけを必要とするのは交換價值の側である。だから我々は使用價值を暫く措いて交換價值について考へる。然して我々が交換價值を問題とする場合にはその實體とその大さが考へられねばならぬ。アリストテレスはこの課題を如何に解いたか。我々は彼の交換價值の分析を「倫理學」に就いて學ぼう。

三

交換價值は交換を前提とする。だから交換價值の分析は交換現象の本質的條件の考察を基礎とする。この條件の上に交換價值が基礎づけられる。「倫理學」の正義論の中で「交換的正義」^(註一)を論じた部分がこれにあたる。

(註一)「交換的正義」とは全般的正義(合法的な行爲、法を遵守する行爲)に對する特殊的正義としての分配的正義(國家の成員の間に分割せんとする名譽又は富又は其の他の物の分配に於いて示され人と分配額との幾何學的比に存す)と矯正的正義(人と人との折衝に於いてなされたる不正義を矯正するものにして算術的比による平等に存す)との二つの性質を併せ有し「比例に進じた相互利益」である。¹⁾然してアリストテレスの價值論に於いてはこの交換的正義論が根本思想をなし

てゐる。

アリストテレスによれば比例的平等なくして交換は起り得ない。交換が起るのは比例的平等が存するからである。然して比例的平等これが交換に於ける正義なのである。曰く。

「……交換の爲めの團體に於ては次のような正義が人々を結びつけてゐる。即ちそれは比例に準じた相互利益であつて、精確に平等報酬を基礎とするものではない。何となれば市が結び合つてゐるのは相互的報酬によつてであるからである。人々は惡には惡を以て報いんとし——そして若し彼等はそうする事が出来なければ彼等の地位をたゞ奴隸的だと考へる——善には善を以て報いんとする——そして若し彼等がそうすることが出来なければ交換は存在しない、然も彼等が結び合つてゐるのは交換によつてなのである。……」

「扱てこの比例的報酬は相對應する連結によつて確保せられる。 A が大工 B が靴屋であり、C が家屋で D が靴だとする。すれば大工は靴屋から後者の製品を得なければならぬ。そして自らは靴屋にその代償として彼自身の製品を與へねばならぬ。ところで若し先づ財の比例的平等が存するならば、その時には、相互の行動が起り、上述の如き結果となるであらう。若し財の比例的平等が存しなければ、取引は平等でなく、従つて行はれない。蓋し一者の製品が他者のそれよりも「價值の上で——筆者」よりよくあることを妨ぐべき何物も存しないから。故にそれ等は平等にせられねばならぬ。而して斯くの如きは他の職業の場合にも亦眞實である。何となれば、もし受容者の受くるところのものが、行爲者のなしたところのものと丁度等しくなかつたならば、そして同一の量と品質とでなかつたならば、其の職業は絶滅せしめられたであらうから」。

(註二) アリストテレスは A・B・C・D を假定したのみで完全な説明を下してゐない。英譯者 Ross はこゝに次の如く脚註してゐる「A と B とが異つた職業の職人とする。そうすれば、正常的とは異つた程度の價值を有つであらう。それ故に彼等の生産物は不等なる價值を有つであらう。例へば $\pi\rho\iota\sigma\tau\omicron\varsigma$ とすれば C (A の例へば一時間の生産物は、D (B の一時間の生産物) の n 倍の價值を有つであらう。若し A が n 倍の D を B が一つの C を取るならば——例へば A は彼がそれを作るに一時にかゝるところの物を B がそれを作るに n 時間にかゝるところの物と交換に與へるならば——公平な交換が起るであらう。」とかくて交換の根本條件が究明された。それは比例的平等である。然らば比例的平等が存し得る

2) Ethica Nichomachea. V. 5. (ibid. p. 1132 b—1133 a).

ためには如何なる條件を必要とするか。こゝに於いて問題はいよいよ交換價值の分析に進む。アリストテレスは續ける。

「何となれば交換のために結合するのは二人の醫者ではなくて、醫者と農夫、或は一般に差異あり不平等な人々である、が然し、これらの人々は等一化せられねばならないからである。これが交換されるところの總ての物が如何にしてか比較され得なければならぬ理由である。貨幣が採用されたのはこの目的の爲であつて、それは或意味に於て仲介物となるのである。何となればそれは總ての物を量り、從つて過多及び過少を、例へば如何程の靴が一軒の家に對し或は一定量の食物に對して等しきかを量るのである。故に一軒の家に對し「或は一定量の食物に對して」交換される靴の數は大工の靴工に對する比率に一致しなければならぬ。何故なら若し然らざれば、如何なる交換も如何なる取引も存在しないであらうから。然してこの比例は若し諸々の財貨が如何にしてか平等なるものでなければ起り得ないであらう。それ故總ゆる財は……何か、一つのものによつて量られねばならぬ。」

こゝでアリストテレスは人間の關係と物の關係とを同時に提出してゐる。我々が商品の中に發見する物の關係即ち交換價值は實は人間の關係即ち社會關係である。だから彼がこの二つの關係（實は一つであるが）を意識してゐることは正しい。然しそれを同時に提出した事は我々の理解を幾分紛らはしくする。然しながら交換が起るためには「人々は等一化せられねばならない」と特に言はれたことはアリストテレスに於ては特殊の意義を有つた。何となればギリシヤの社會に於いては人間の不平等が人間關係の根本原理をなしてゐたからである。人間が人間として、形式的にもせよ、自由であり平等である社會に於いては交換價值の研究に於いてこの事は全く問題となり得ない。——ロス³⁾は右の點を解釋して曰く「然しながら單純な相互利益、例へば一日の製品に對す

3) ibid. p. 1133 a—1133 b.

4) 「訓詁的方面」に於ては大きな能力を示された 福田德三博士もこの點を理解されなかつたやうである。博士著「厚生經濟研究」中に於ける「アリストテレスの流通の正義」(特に同書125頁以下)參照。

る一日の製品の如きは起らないであらう。何となれば交換當事者は異つた價值の人々なのだから彼等及び彼等の生産物は、交換が起る以前に等一化されねばならぬ。」と。スミスが人間の平等な社會に於いては「通例二日又は二時間の勞働の所産は通例一日又は一時間の勞働所産の二倍の價值あるべきは當然である。」⁵⁾と言つてゐるのを之に對照する時、這般の事情は自ら明かであらう。

かくてアリストテレスは交換價值の分析に社會關係から入つて行つたが、結局その結果は物の關係の内に發見されることを見出した。「交換されるところの總て物が如何にしてか比較され得なければならぬ」と。交換が起るためには比例的平等(相等性)が存しなければならぬ。然して比例的平等が存するためには異なる物の間に比較され得る關係(通約性)がなくてはならぬ。比較され得るためには通約者即ち物の共通單位が必要である。共通單位即ち彼の所謂「何か一つのもの」とは一體何であるか。換言すれば交換價值の實體は何であるか。彼は續けて言ふ。

「扱てこの單位は實は需要(demand)である。需要は總ての物を結び合せてゐるものである。(何となれば若し人々が相互の財を全然欲望することがないならば、或はそれらを平等に欲望することがないならば、如何なる交換も或は相互間同等の交換はあり得ないであらうから)而して貨幣は慣習によつて需要なるものゝ一種の代表者となつたのである。然してこの事は貨幣が『貨幣』(nomisma)なる名稱を有する所以である。——蓋し貨幣は自然によつてはなく規約(nomus)に依つて存するものであり、我々の力によつてそれを變じ無効にすることが出来るものであるから。靴工の製品量の、それが交換せらるゝ農夫の生産物量に對するや、農夫の靴工に對するが如くであるやうに、條件が等一化せらるゝ場合には相互利益が存するであらう。然しながら我々は彼等が既に交換を行つて了つた後には、彼等を比例の形態に齎すべきではなくて(然らざればその一外項は兩超過額を有することになるであらうから)、彼等が尙彼等自身の財を有する場合に於いてそうすべきである」⁶⁾

5) W. D. Ross. Aristotle. p. 212.

6) A. Smith. Wealth of Nations ed. by Cunnan. Vol. I. p. 49.

7) Ethica Nicomachea. V. 5. (ibid. p. 1133 a—1133 b).

(註三)この章句は非常に難解である。ロスは次の如く註してゐる。「……こゝに於けるアリストテレスの意味は斯うでなくてはならぬ。即ち、人々はでたらめな量で財貨を交換し、その後彼等自身を『比例の形態』に齎らしてはならぬ、と。何故ならかゝる場合には各々は彼が手放す財貨には法外に高い價值を附し、彼が受取る財貨には法外に低い價值を附するであらう、そしてなさるゝ如何なる修整も彼等夫々の掛引の技倆によつて決定されるであらうから。一方は他方に對し『兩超過額』を持つであらう。蓋し彼が獲るところのものは中間を超過し、他が獲るところは中間に達せぬであらうから。唯一の公正なる方法は、各々が彼等が交換する以前に、自分自身の財貨及び他人の財貨の上に價值を附し、出來るならば協定を行ふに至ることである。」と。

「かくの如くして彼等は平等であり、然して正にこの平等が彼等の間に成立するが故にこそ彼等は相互に取引するのである。Aは農夫、Cは食物、Bは靴工とし、後者の生産物DはCに等一化せしめられるとする。若しかくの如く相互利益が成立しなかつたとすれば、當事者の取引は存しなかつたであらう。需要が單一な單位として人々を結合するといふ事は次の事實によつて示される。即ち人々が相互を必要としない場合、即ち何れの一方も他方を必要としない場合には、彼等は交換を行はない、けれども一人が他人自身が有するところのものを必要とする場合、例へば人々が葡萄酒と交換に穀物の輸出を許諾する場合には我々は交換を行ふといふ事實によつて、故にこの等一化が確立せられなければならないのである。そして將來の交換に對しては、即ち若し我々が現在財貨を必要とせずして、それを必要とする時に得ようとするならば貨幣はいはゞ擔保となるのである。何となれば我々は貨幣を持參することによつて我々の必要とするものを得る事が可能でなければならぬからである。擬て貨幣そのものに對しても、財貨に對すると同じことが起る——即ち貨幣は必ずしも常に同價值ではなないけれども貨幣はより不動なる傾向を有する。これは總ての財が自己に價格を附與する理由である。何となればかくあるときは常に交換が行はれ、而して交換が行はれるならば人と人との結合が存在するであらうから。」¹⁰⁾

かくの如くアリストテレスは交換價值の實體を尋ねて需要に到達した。そこで我々は需要に就いて考へて見よう。需要或は欲望と稱せらるゝものは二つの面から考へられる。特殊性の面と普遍的性の面とから。第一に特殊性に於ける需要は直接個々の外物に關係する個別的具體的な欲望で

8) 福田博士はこの點 Ross の譯は曖昧だとして、J. Eurnet (The Ethics of Aristotle, London, 1900) によつて次の如く譯出されてゐる。「需要は一の單位となつて諸物を結び付けることは次の事實によつて示されてゐる。若しも人々が相互を要せざるるとき換言すれば何れの人も、他人を要せざるか、若くは一人が其の相手方を要せざるときは交換は行はれない。其の反對に一方の要するところのもの、他方が有つてゐるときは交換は行はれる。例へば穀物輸出

ある。(この意味に於ける需要の對象としての外物は使用價值である。使用價值のこの需要に對應しての實現それが效用であらう。) この需要は經濟生活の固有地盤ではある。蓋し欲望なくしては經濟生活は不必要であり不可能であるから。交換も亦經濟生活の一部に外ならないから、その限りに於いて必要な地盤の上にのみ發生存立し、従つて必要なものゝ規定を受くるは言を俟たない。だが最も普遍的なる經濟生活の地盤としての需要を以て直に特殊なる經濟生活としての交換を充分に説明することが出来るか。この「需要が單一な單位として人々を結合する」といふ事、従つて「需要は總ての物を結び合せてゐるものである」ことに擬ひはない。だからと言つてこの意味の需要さへあれば交換が起るのではない事は餘りにも明かである。何故なら、アリストテレス自身言つてゐる如く、交換が起るためには財の量的關係を必要とするのに、この需要は全く質的なものであつて量的ではないからである。

第二に需要は普遍性の面を持つ。こゝでは需要はその總ての特殊性から捨象されて、需要或は欲望一般である。それは特殊性から捨象され一般的であるが故に、他の需要と比較され得る。即ち量的である。第一の需要は質の面であり、これは量の面である。(この需要に對應する外物は量的に限定された使用價值即ち使用價值一般だと考へらる。)⁹⁾アリストテレスが交換價值の實體だとしたのはこの第二の需要である。然らば交換價值の大きは何によつて計られるか。需要の大きさによつて。而して需要の大きさは貨幣によつて計られる。貨幣は需要の單位である。即ち「貨幣は慣習によつて需要なる

の特權を葡萄酒(の輸入)に對して交換するが如きこれである。」(福田博士、前掲書 95頁)。

9) Ethica Nicomachia V. 5. (ibid. p. 1133 b).

ものゝ一種の代表者となつたものである。要するにこの意味に於ける需要は交換價值の實體であり、貨幣は需要の定在である。かくしてアリストテレスの求めた交換に於ける共通單位即ち交換價值の實體とその大さは明かにされた譯である。^(註四)

(註四) アリストテレスの方法を發展せしめたヘーゲルは「法の哲學」の中に次の如く述べてゐる、がそれはアリストテレスを理解する上に有力な手がかりを與へると思はれる。「使用に於ける物は質及び量の上から限定された個別的なものであり、且つ特別の欲望(ein spezifisches Begehren)に係はる物である。併し物の特殊の可用性(Brauchbarkeit)は同時に量的に限定されたものとしては他の同様の可用性をもつ物と比較され得る(vergleichbar)また物が役立つ特殊の欲望は同時に欲望一般(Begehren überhaupt)であり、且つ特殊の欲望は欲望一般に於いて欲望の特殊性に従つて同じく他の諸欲望と比較され得る、そしてこれよりして物はまた他の諸欲望に使用され得るものと比較される。物のこの普遍性が物の價值(der Wert der Sache)である。そして普遍性といふ單純な規定性は物の特異性より出で従つて同時にこの特種の質から捨棄される。價值に於いて物の眞實の實體性が規定され、價值が意識の對象である。……………」¹⁰⁾

アリストテレスは續けて以上の所論を要約的に繰返へしてゐる。

「斯くて貨幣は尺度として機能しつゝ財貨を測定せられ得るものたらしめ、それらを等一化する。蓋し交換なければ取引は起らないであらう、然して等一化なければ交換は起らないであらうし、又測定され得る可能性なければ等一化は存しないであらうから。而して斯くの如く著しく相違せる諸貨物をして測定し得るものたらしめるといふ事は實際には有り得ない。然し需要に關係して左様になる事が十分出来るのである。然らばそこに何らかの單位、而して合意によつて定められた單位(この故に貨幣と稱せられる)がなければならぬ。何故なら總ての財貨は貨幣によつて測られる故、諸財貨をして測定し得るものたらしめるのはこの貨幣であるからである。¹¹⁾ Aは一軒の家、Bは十ミナエ、Cは一個の寢床と假定せよ。而して其の家屋は五ミナエに値する換言すれば五ミナエに等しとすれば、AはBの半ばである。寢床CはBの十分の一とする。この場合幾個の寢床が一軒の家に等しいかは明かである。即ちそれは明かに五個である。然し貨幣があつた前に、斯くの如き方法で交換が起つたことは明白である。何となれば一軒の家に對して交換せらるゝものが五つの寢床であらうが、五つの寢床

10) Hegel Grundlinien der Philosophie des Rechts, § 63 (Lassonische Ausgabe, Phil. Bibl. Bd. 124 S. 66.).

11) 貨幣の共通尺度としての機能については、Ethica Nicomachea. IX. 1. (ibid. 1164 a) にも述べられてゐる。又、流通用具、價值蓄積手段としての貨幣の機能については上に引用した同じ個所に見られてゐる。更に貨幣の發生については、Politica. I. 9. p. 1257 a 參照。これらによつてアリストテレスの貨

の貨幣價值であらうが異ならないからである。」¹²⁾

扱て以上を要約しよう。アリストテレスは交換價值の分析をなすに當つて、先ず交換の本質的條件から出發した。交換が起るためには比例的平等が存しなければならぬ。比例的平等が存するためには人と人との關係が等一化されねばならぬ。然して人間關係の等一化は物と物との間に通約性を要求する。そのためには物の間に相等性があることが必要である。然るに個別特殊な使用價值としての「著しく相違せる諸貨物をして測定し得るものたらしめるといふ事は實際には有り得ない。」(マルクスはこの句を以つて、アリストテレスが價值形態の分析を放棄したのだと解してゐるが、我々はアリストテレスの本意からむしろ上のように解すべきだと考へる。)そこで物の普通性の面、即ち一般的、使用價值の面が考へられる。この面に於てのみ物の間に相當性が見られる。物をして使用價值一般たらしめるものは特殊性から捨象された人間の需要一般である。この需要こそ價值の實體である。この需要の體現者たる使用價值一般としての物は價值又は價值物である。而して需要の價值測定の機能が慣習によつて特定の財に固定したものそれが貨幣である。貨幣はそれ自體價值であり、價值の實體即ち需要の「代表者」であることをその本源的の機能とする。かくてアリストテレスの交換價值の分析は、交換價值から出發してその實體を探り、その實體によつて交換價值を基礎づけて、遂に貨幣形態にまで到達したのである。

四

幣論は體系づけらるべきである。

12) Ethica. V. 5. (ibid. 1133 b).

以上我々はアリストテレスの價值論を觀て來たのであるが、之に對して若干の批判を附け加へよう。そのために先ず我々は彼が價值論の出發點に於いて有した富の規定を想起しなければならぬ。そこで注意さるべきは彼が富の一つの規定を認め得なかつたといふことである。といふのは外ではない、彼が富の勞働規定を看落したことである。富は勞働の生産物にして人間に有用なる物であるべきだつた。(石川博士前掲論文參照)。成る程アリストテレスは富は家政にとつて「手元に用意し又は自ら支給しなければならぬ物」即ち人間によつて獲得される物であると言つては居る。然しそれは富の獲得が人間勞働の犠牲を要費するといふ意味に於てではない。勿論彼は富が本源的には人間勞働の結果であることを知らなかつた譯ではない、現に彼は富の取得論に於いて自然的取得——特に原始産業を説いてゐる。それにも拘はらず、後に述べる様な理由で富の勞働規定を問題とすることが出来なかつた。従つてこの富がとつた一定の現象形態たる單純商品の分析に於ても、勞働は問題となり得ず、交換價值の本質は、既に述べた如く、勞働規定からは獨立無關係であつた。即ち彼は富の使用價值と勞働價值との相對立する二重性の中使用價值の側に於いて交換價值の實體を見たのであつた。而して彼が現象形態に於いて把握した富の概念の不完全さは逆に、彼が普遍的な經濟價值(富一般)として把握したところの富の概念が不完全であつたといふ事を付度せしむるのである。

右に對して正にアンティテーゼをなすものは所謂勞働價值説である。それは富の使用價值の面

を捨象して労働価値の面からのみ交換価値の本質を規定する。この労働価値説が一面的であるとの批難を免れ難いにしても、少くとも価値論は労働価値の面を含まずしては抽象的であることは富そのものの構造から明かである。この意味でアリストテレスの価値論は一面的抽象的である。それは上に述べた如く富の労働規定性が厳密に把握されなかつたからである。然らば何故富の労働規定更には人間の物質的生産活動が「価値形態をば多くの思惟諸形態や社會諸形態や自然諸形態やと共に始めて分析したところの偉大な研究者」¹⁾アリストテレスの鋭き意識の反省にのぼり得なかつたか。その理由を我々は彼の社會的生の事情に求めなければならぬ。(同様にマルクスに於てはアリストテレスに於けるとは反對に労働規定性が強く現はれてゐるが、これも亦其根柢たる彼の生の事情より初めて理解され得るであらう。即ちそれはギリシャの社會が奴隷を持ち、そこに於ては奴隷經濟が支配的であつたことである。この事實は理論に反映せざるを得ない。アリストテレスの価値論がその社會的基礎としての奴隷經濟に制約せられてゐることは否定され得ない。彼も亦時代の子である。然してアリストテレスの偉大さは、彼が彼の體驗たるこの社會關係の制約を免れたといふ事を超歴史的に論證することによつてではなくて、この制約を受けつゝ而も事象の本質を闡明せんと努力した事を批判的に理解することによつてのみ知らるべきである。以下我々は當時のギリシャに於ては奴隷經濟が支配的經濟組織であつたといふ事實の上でアリストテレス価値論の吟味を續ける。

然らば奴隷制とアリストテレスの價值論は如何なる關係を有つか。第一に奴隷制の下に於いて

1) Marx. Das Kapital. I. (Volksausgabe). S. 25.

は勞働嚴密には勞働力が商品でなかつたといふ事が考へられる。アリストテレスの價值論を可能ならしめたものはギリシャに於ける貨幣經濟の發達であるが、その發達せる商品生産經濟も單純商品生産に限られ、勞働力を商品として有つことは出來ず、従つて勞働生産物は完成せる一般的商品形態をとり得なかつた。それは勞働商品の出現が人間の一般的自由を前提とするのにギリシヤは奴隸制によつてそれを拒否したが故である。そこでは勞働は自由勞働ではなくて奴隸勞働であつた。かくの如く人間自身が商品であつて勞働が商品でなかつたといふ事（従つて商品形態が完全に一般化しなかつたといふ事）が、勞働生産物の内に勞働要素を發見することを困難ならしめた最大の理由である。

次に人間勞働が經濟價值の源泉と考へらるゝためには、たとへ形式的にもせよ、人格の尊重、従つて人間の自由が一般的に認めらるゝに至るまで社會が發展してゐることを前提とする。然るにギリシヤでは社會はそこまで進んでゐなかつた。ヘーゲルは言つてゐる。

「自由の意識はギリシヤ人に於いて始めて現はれた。故にギリシヤ人は自由ではあつたが併しローマ人と同様唯だ少數の者が自由である事を識つたにとゞまり人間は人間として、自由であるといふ事を意識し得なかつた。プラトーン、アリストテレスでさへこの事を悟らなかつた。ために、ギリシヤ人は奴隸を私有し、その全生活と美はしき自由の維持とをこれに負ふたのみならず、又その自由は一面偶然にして變化するところの限りある華であると共に、他面同時に人間的なるもの人道的なるものを蹂躪するところの苛酷な奴隸制であつた。」²⁾

奴隸制の下に於いては人間社會は自由人と奴隸とに分裂し人間の不平等はその根本原理である。

2) Hegel. Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte. (Reclam) S. 52. 鈴木權三郎氏譯 31—32頁。

そこでは市民即ち自由民だけが人間であつて、奴隷は人間ではない。アリストテレス自身言つてゐる。「奴隷は生きた道具である」³⁾と。ギリシヤに於てはこの道具としての奴隷が物質的生産活動を負擔したのである。ヘーゲルはかうも言つてゐる。

「この奴隷制度は美的な民主政治、即ち各市民が公共の廣場に於いて身體を練り祭を共に祝ふべき權利と義務とを持つ様な政治にとつては必要缺くべからざる條件であつた。換言すれば市民が手工労働から自由であること、従つて我々に於いては自由市民によつて爲されてゐる事柄即ち日常生活のための労働はこれを奴隷に委ねるといふ事が此等の國民的職務の條件であつた。市民の平等といふ事も奴隷だけを例外にしたのである」⁴⁾と。

即ちギリシヤ人「彼等は爲すべき苦役があれば悉く之を奴隷に一任し自らは自己の趣好を自由に恣にしてゐた」⁵⁾のだ。従つて一切の物質的生産活動は墮落せるものとして蔑視された。アリストテレスは「理想國家論」の中に言ふ。理想的社會即ち最も有徳なる國家に於いては「市民は工人又は商人の生活を送つてはならない、何となればかゝる生活は徳に有害なるが故である。また市民は農夫であつてはいけない、何となれば徳の啓發並に政治的義務の履行にとつて閑暇が必要なるが故である」⁶⁾と。かくの如きは勿論人類歴史の生産力未發展の段階に於いて人間の文化的享受時間の増大が、労働時間の短縮による經濟生活の合理化によつてではなくて、物質的労働の階級的分割による合理化によつて行はれた事を示すものに外ならない⁷⁾。それは兎も角として、物質的労働が人間の仕事ではなくて、道具としての人間の作用に歸せらるゝならば、物質的労働は市民としての眞の人間に對して何等の犠牲でもなく、富は人間に對して何等の生産的犠牲を要費する

3) Ethica Nicomachea, VIII. 2. (ibid. p. 1161 b).

4) Hegel, a. a. O. S. 332—333. 鈴木氏譯 488頁。

5) A. Marshall, Principles of Economics, p. 728. 大塚氏譯 1. 269頁。

6) Politica, VII. 9. p. 1328b.

7) この點に關してアリストテレスの次の言は特徴的である。「……若し導く手なくして梭が織り、撥が立琴を弾くとすれば、親方は僕婢を要しないでもあ

ものではない。従つて物質的生産活動は自由市民にとつては何等の關心事でもなかつた。だからアリストテレスが對象とした富、即ち非人間的人間の労働の生産物の中に人間的要素としての労働規定を認め得なかつたのは必然であり、まして人間的労働一般を観るといふ事は全く不可能だつたのである。

又右の如く市民が物質的労働を免れてゐた結果、單に労働のみならず、マシーナルも言つてゐる様に、廣く經濟問題そのものが、一般的に言つて、ギリシャの支配者達の關心に上り得なかつた。彼等が經濟活動に對し關心を有つたとすれば、消費と更には精々彼等市民の富の獲得の仕方たる交換とであらう。消費のための交換それが彼等の唯一の經濟活動であり、又あるべきであつた。^(註二)消費は結局直接の欲望充足活動であり、欲望の普遍性の面がアリストテレスの言つた「需要」であるとするれば、交換及び交換價值が消費活動の主要契機たる欲望即ち「需要」によつて説明されたのも決して謂はれなきことではない。かくして我々は彼の積極的主張をもその社會的基礎から理解し得るのである。

(註一)アリストテレスは富の取得の方法を分つて(1)自然的取得と(2)交換的取得とした。後者は更に(イ)人間に必然的な交換と(ロ)貨幣のための交換とに分れる。彼は(1)と(2)の(ロ)とが正しい富の取得方法だと考へた。(1)に屬する漁獵・牧・農・鑛等は原始的な直接的な自然的取得であり奴隷の仕事である。間接的な自然的取得たる工藝も市民のなすべき業ではない。殘るところ市民のなし得る正當な富の取得は人間に必然的な交換的取得、即ち消費のための交換だけである。⁽⁹⁾

要するにアリストテレスが價值の労働要素、富の労働規定更には人間の物質的生産活動を自覺

らうし、主人は奴隷を要しないでもあらう。」(Politica. p. 1253 b).

8) Marshall. *ibid.* p. 729—730.

9) Politica. I. 8. (p. 1256 a).

し得なかつたのは、當時未だ商品形態が勞働生産物の一般的形態でなく、かくてまた商品所有者としての人間相互の關係が支配的な社會關係でなく、従つて人間的平等の概念がまだ國民的信念にまで固定されてゐなかつたからである。彼は、當時の支配者達が一切の生産的犠牲を、奴隷階級に轉嫁して顧みなかつた「苛酷な奴隷制」を、その理論に翻刻した。その限りに於て彼の價值論は一切の物質的生産活動を免れてゐた當時の消費者階級としての支配者的觀點に立つと言ふことが出来るであらう。人間的勞働一般による價值概念はアダム・スミスによつて初めて經濟學の基礎とされリカードを経て、マルクスに於いて最も徹底せしめられた。それは、その後の長き經濟社會の發展が遂に奴隷勞働をして非生産的たらしめたこと、¹⁰⁾及びそれに應じて、キリスト敎を通過することにより人間の(形式的ではあるが)一般的自由が確立せられたことによつて、自由勞働者が出現し、従つて勞働生産物の商品形態が一般化したからであつた。而してその徹底は、この新しい經濟組織の内に於て階級分裂は決定的となり、再びかの「苛酷な奴隷制」を思はせるところの生産の犠牲階級に對する熱烈な同情が喚起せらるゝに至つた社會的生の基礎の上に於てゐあつた。

右の如くアリストテレスの價值論の不完全なるにも拘はらず、我々が一度價值論の根本に立ち歸へるならば、かくの如き奴隷經濟に立脚して、然もなほ、價值論に先鞭をつけ得たアリストテレスの偉大さに驚嘆せざるを得ない。その譯はギリシャが發達せる商品經濟を有したからである。そこでは早くから外國との交易盛に行はれ貨幣經濟は相當發達を遂げてゐた。ために氏族制度は

10) A. Smith. Wealth of Nations. (Cannan) Vol. I. p. 82.

11) Hegel. a. a. O. S. 53.

破壊されて私有制が殆んど確立された。然して彼等の間に奴隷労働を基礎として商品生産及び商品取引が盛に行はれたのである。要するに當時のギリシヤの經濟組織の特徴は奴隷労働に基く貨幣或は商品經濟にあつたが、正にこの點にアリストテレスの價值論に於ける輝しい功績と同時にその限界の社會的基礎が見出されるのである。

以上我々はアリストテレスの價值論と其社會的基礎を觀て來た。マルクスはこのアリストテレスの價值論を尊重しながら全くその對蹠點に到達した。然して我々はこの二人の大思想家の結論の相違は各々が屬した社會の歴史的發展段階の相違に相應するを見るのである。デイルタイは言つてゐる、「精神科學的方法には體驗と概念との不斷の交互作用が内在する」¹²⁾と。我々は更に新しい現代の體驗に基づき、この問題に對するより具體的綜合的な解決を求めねばならぬであらう。

12) Dilthey. Das Wesen der Philosophie (Diltheys Gesammelte Schriften. Bd. 5. S. 341).